

高梁川流域連携中枢都市圏事業

高梁川流域学校

—— 第1期年次報告書 ——

2016年3月

一般社団法人 高梁川流域学校

ご挨拶

高梁川流域学校は、平成27年6月に設立され初年度の事業は全て終了いたしました。「高梁川流域の風土と歴史・文化を再考して大事に継承したい」と私たちの思いは、どれだけ地域社会に届けることが出来たでしょうか。

目まぐるしく変化していく現代社会において、自らの立ち位置を理解して行動していくことは至難の業になっています。その行動の術を獲得するのに私が提案できる方策は、自身の生まれ育った地域を学び、自らのアイデンティティを知ることです。地域の文化に真摯に対峙しそのことを共有することの中に、これからの時代を生きる手がかりがあります。高梁川流域学校の内、私が塾長を兼任している備中志塾では、その手がかりを一緒に見つけ出し、「普通のねうち」を備えた次世代人材を育成することを目的としています。地域を創るのは志をもつ人であり、その人を生み出す仕組みとして、「高梁川流域学校」を育てていきたい、と思っています。

高梁川流域学校 校長 神崎宜武



高梁川流域学校

目次

- 02 ご挨拶
- 03 目次
- 04 高梁川流域学校について
- 07 事業紹介
 - 08 高梁川流域学校設立記念シンポジウム
 - 09 高梁川トレイルによる風土ツーリズム開発
 - 10 高梁川マルシェ
 - 11 SAVE JAPAN プロジェクト
 - 12 備中で暮らす匠（先人）への「聞き書き」事業
 - 13 倉敷市文化遺産を活かした地域活性化事業
 - 14 高梁川の川ゴミ調査
 - 15 水島コンビナート関連勉強会（水島コンビナートの進化）
 - 16 高梁川ミーティング
 - 17 高梁川流域学校 初等部 あちのもり分校 冬の教室
 - 18 学生未来プランコンテスト「コヅチ」
 - 19 協力事業
- 22 組織概要

高梁川流域学校について

一般社団法人高梁川流域学校 代表理事 大久保憲作



身近な隣人たちと

地域の明るい未来のために

高梁川流域学校が目指す活動のビジョン(目標)は、昭和29年3月に大原總一郎氏が書き上げた「高梁川流域連盟趣意書」にみる事ができます。この趣意書の冒頭には、「ユネスコ憲章前文に世界の平和は心の平和にある。各国の習慣風俗を知ることが戦争の悲劇から遠ざける」「高梁川流域の人々はこの川を機縁として互いに理解を深め、愛親しみ、協力してこの川を守り、この川で培われた文化や産業の共同体をより美しく、より合理的に築き上げなければならない」と記されています。

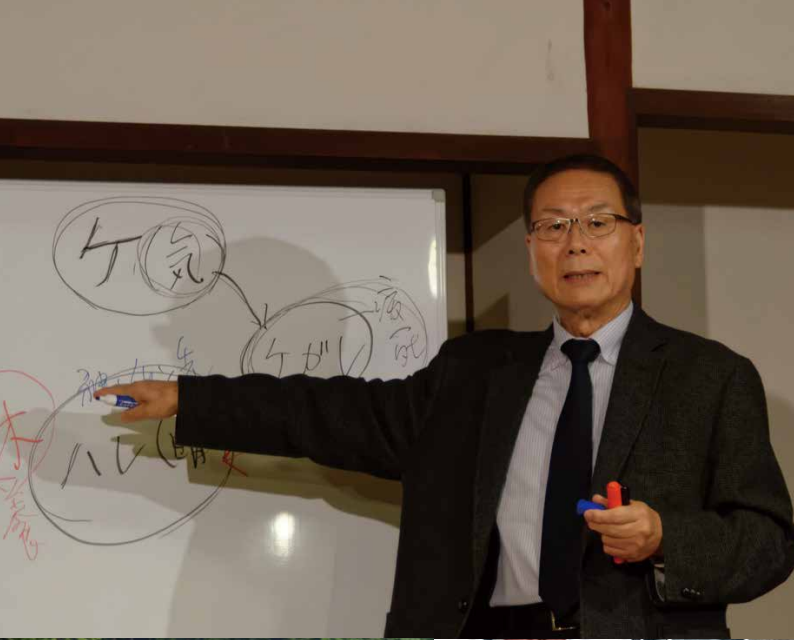
私たちは、この趣意書に深く賛同し、日本が国際間で果たすことが期待される役割を理解すると同時に、親和協力の精神をもって身近な隣人たちと地域の明るい未来のために働き、さらに有意義な活動を生み出すことが出来るよう、「高梁川流域学校」をスタートさせました。

折しも高梁川流域成長ビジョンの中でも「高梁川流域学校事業」として位置づけられることとなり、圏域の大学、企業、各種団体等との産学官民の連携により、圏域の将来を担う人材育成とコミュニティの意識向上を図ることを、そのミッション(使命)とする事になりました。

このような背景を受けて、平成27年度高梁川流域学校では、高梁川が森里川海のつながりの中で形成してきた流域圏、瀬戸内を含む備中地域をフィールドとして、主催7事業、共催4事業、協力事業3事業、シンポジウム2事業を実施いたしました。いずれも高梁川の自然、歴史・文化、産業、町並み、食、子育てなどで実績のある事業体の活動を基盤にして、次世代につなげるべき大切な地域の「知」を、「学び」として体系化し、「普遍的なぬちを持つ備中人」を育成、新たな流域圏の創造していくための礎になる事業です。

平成28年度は、神崎校長が講義を担当する「備中志塾」を基礎(人口)として、プログラム構成を見直し、その磨き上げと体系化を図り、流域圏に広く情報を発信するために、高梁川流域ネットワーク(TIN)と2つのコミュニティ(FM)との連携を強化していきたいと思えます。そして、全国初となる「流域学校」という新たな地域教育コミュニティを構築し、その中でソーシャルビジネス化も検討していく考えております。

まだまだ立ち上がったばかりの組織で行き届かないところも多々ございますが、引き続き、皆様のご指導、厚情をよろしくお願いいたします。



風土を
学び
次世代に
繋ぐ

未来を
創る
仕事を
興す

先人に
学び
匠に
習う

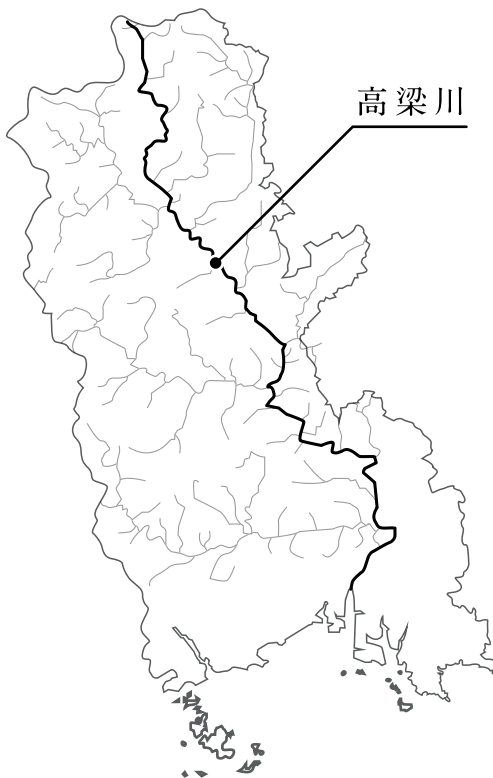
節季を
感じ
旬を
味わう

自然を
楽しむ
多様性を
知る

高梁川流域学校

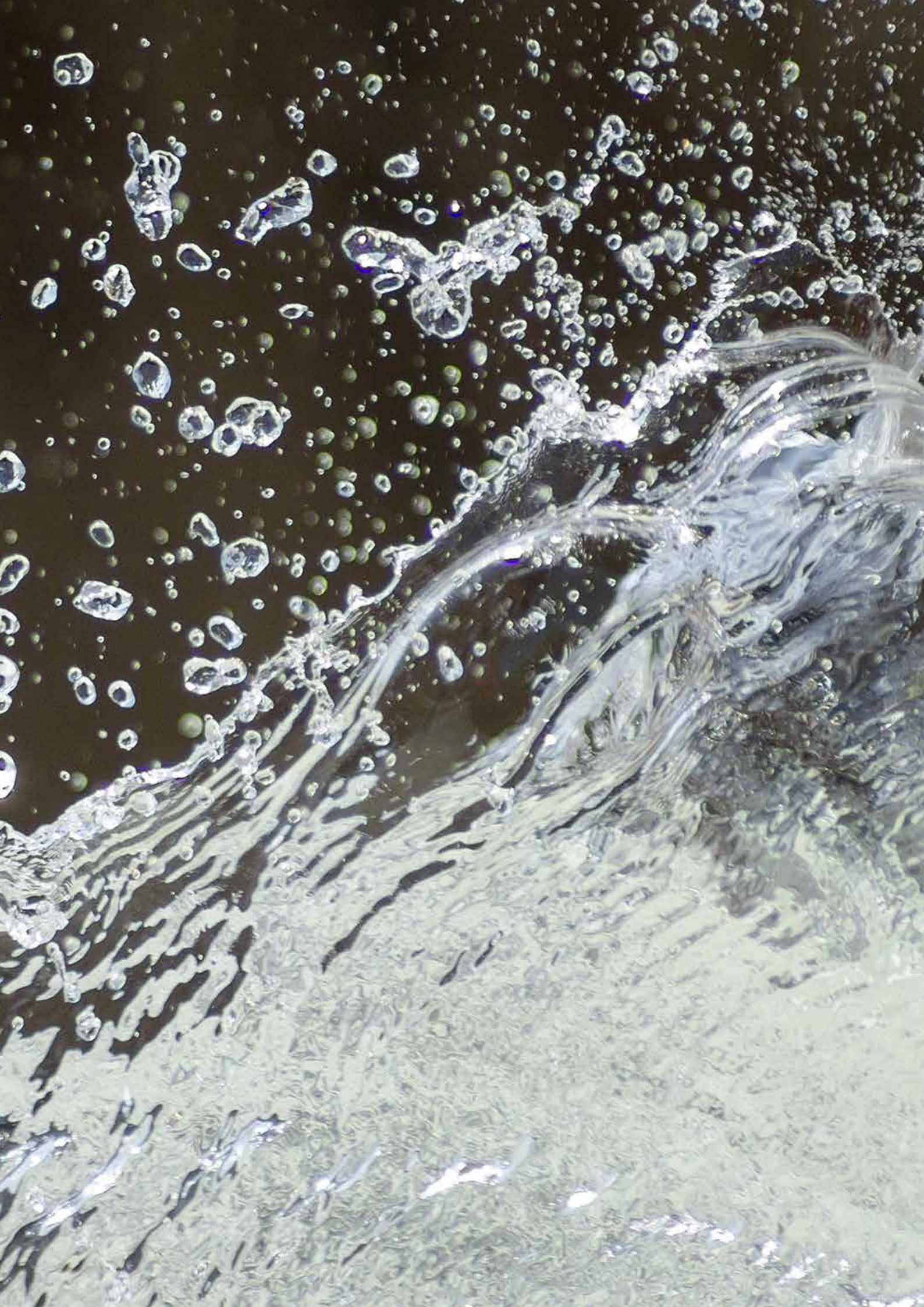
高梁川流域学校は、大学・企業・地域団体・自治体などと連携し、流域の自然や歴史・文化、及び産業を「地域教育」の教材として、持続的に提供することを目的としています。

これらの活動により、「学校教育」「家庭教育」を補完し、若い世代の郷土愛・地域への誇りを醸成するとともに、さらに自治体や企業の人材育成研修を実施し、将来は、風土ツーリズムとしての地域観光プログラムの事業化を目指しています。



高梁川流域圏

- 新見市
- 高梁市
- 総社市
- 早島町
- 倉敷市
- 矢掛町
- 井原市
- 浅口市
- 里庄町
- 笠岡市



高梁川流域学校
事業紹介

全14事業(内、共催事業3事業、協力事業3事業)
延べ 参加人数7,959人

高梁川流域学校設立記念シンポジウム



高梁川流域学校の設立の経緯、理念を説明し、講演、シンポジウムを通し流域地域に広く情報発信

高梁川流域学校の設立の経緯、理念を説明し、人材育成の在り方や事業化を検討するワークショップと、講演、シンポジウムを開催することによって、流域地域に広く情報発信することを目的として開催しました。

午前中は2つの分科会で「地域に根差した学びを考える」「流域学校の事業化を考える」をテーマにしたワークショップを実施し、それぞれ約20名の参加がありました。午後からは、「高梁川流域学校の昨日と明日」を題目にした神崎校長の基調講演とシンポジウムを実施しました。参加人数は、約160名。

神崎校長の講演では、「何代にわたって綿々と受け継がれてきたバトンをつなぐことが、われわれに課された使命。流域自治体、市民団体、企業など手を携えて、地域の文化、風土をみんなで共有し、次の世代につなげていきたい」と力強く語られました。

シンポジウムでは、ボン大学名誉教授ヨゼフ・クライナー氏から「水運が流域をつなぎ異質な考えや文化を受け入れる土壌が生まれた」、認定NPO法人共存の森ネットワーク理事長澁澤寿一氏は、「持続可能な社会を取り戻すにはお金でない価値を見直す必要がある」、大原美術館専務理事大原あかね氏は、「備中地域には美術館、博物館などのインフラがそろっている。そういう施設を大切に活用しながら人々が豊かになり、世界に発信できる事業に発展させてほしい」、岡山大学副学長荒木勝氏は、「高梁川流域の現場を学びの場とする取組みと連携し、高等教育の新たな形を見出したい」との発言をいただきました。

■ この事業のミッション

- 高梁川流域学校の理念などの情報発信
- 高梁川流域学校の理解促進、ネットワーク拡大
- 高梁川流域学校のプログラムプロモーション

.....

高梁川流域学校設立シンポジウムにおいては、神崎校長が唱える備中人としての「こころざし」を共有。



高梁川トレイルによる風土ツーリズム開発



歩くことを通して、 高梁川流域の自然の素晴らしさや歴史・文化を学び体験

高梁川トレイルは、かつての松山往来、吹屋往来、山陽道などの古道や高梁川流域の中国自然歩道などをベースにして、歩くことを通して高梁川流域の自然の素晴らしさや歴史・文化、産業などを学び体験する風土ツーリズムを開発することを目的とした事業です。平成27年度は、以下の3つのトレイルを調査開発し、モニターツアーを実施し、計36名の参加がありました。

- (1) 備中高梁臥牛山コース（JR 備中高梁駅～御根小屋～備中松山城～高陣～奥万田～JR 備中高梁駅）
- (2) 吹屋往来～とと道コース（高梁市成羽美術館～総門橋～島木橋～窓坂峠～備中宇治～吹屋）
- (3) 倉敷川とともに歴史文化を辿るコース（JR 倉敷駅～乗り出し岩～先陣庵～藤戸寺～熊野神社～JR 木見駅）

これらの3つのコースを調査開発する過程やモニターツアーをする中で、実際に歩くことによって、かつての地域生活を知り地域の方々との交流も深まり、単にツーリズム（観光）という以上に、地域コミュニティの再構築といった課題解決につながる可能性を実感しました。

また、これらのトレイルの情報をまとめ、オープンデータマップの制作を行い、スマートフォンやタブレットなどでも簡単に情報を取り出せる仕組みも同時に行いました。今後も高梁川流域のトレイル開発を継続し、平成31年度までに12コースのトレイルを開発し、独自の風土ツーリズム開発を事業化する計画です。

■ この事業のミッション

- 高梁川流域のトレイルの調査開発
- 高梁川トレイルのオープンデータマップ制作
- 高梁川トレイルによる風土ツーリズム開発及びその事業化

高梁川トレイル開発によって、地域コミュニティを知り、地図制作することによって新しい枠組みで、地域をつなぐことができる。

地域発の独自の風土ツーリズムにも発展させ、事業化も推進していく。



高梁川マルシェ〜流域時間の過ごし方〜



美しく幸福な暮らし方を感じる時間を 流域のこだわりの食と暮らしの雑貨を通して提供

高梁川マルシェは、普段生活では気づかない流域の美しく幸福な暮らし方を感じる時間を提供するイベントとして、流域のこだわりの食と暮らしの食器や雑貨たちを、倉敷市内の歴史的建造物で、生産者や作家の方々とのお話、音楽やアートと一緒に実感し共有することを目的としています。

平成27年度は、平成27年10月31日(土)・10月1日(日)に、岡山県民文化祭のメインプログラムとして、倉敷市中心市街地にある国指定重要文化財「大橋家住宅」、阿知2丁目公園、林源十郎商店、キャンドル卓「渡邊邸」を会場に実施しました。また、平成28年3月26日(土)・3月27日(日)にも大橋家住宅で、流域の食を体験するマルシェを実施し、延べ3500名の参加がありました。

高梁川マルシェは、平成24年から春と秋の年2回実施し、平成27年度で既に9回目の開催実績があります。ここでは、単にマルシェ(市場)のモノの売り買いだけでなく、高梁川流域の豊かな時間を感じて頂くように、出店者や開催場所、音楽や装飾にもこだわって、流域の食やモノづくり文化の発信や交流の場としての位置づけも行っています。さらに毎回出店者間のコラボレーションによる商品や作品も生み出される風土も出来上がっており、新しい価値創造の場にもなっています。

今後は、高梁川マルシェの質を向上させて、流域のブランドとして商品展開をしていく計画です。

■この事業のミッション

- コンセプトのあるマルシェ「流域時間の過ごし方」
- 流域の食やモノづくりの文化発信
- 高梁川マルシェブランドの創造

高梁川流域の食・モノづくり文化の発信とマルシェを価値創造の場としてブランド化することです。

さらにマルシェ商品、作品をブランドとして商品展開を図っていきます。





高梁川流域に生息する希少種生物を通して、
人の生活と自然環境のバランス、生物の多様性の重要性を学ぶ

高梁川流域に生息する希少種生物の講義・観察と保護活動を通して、人の生活と自然環境のバランス、生物の多様性の重要性を学ぶことを目的として、以下の通り5回のプログラムを実施しました。

- (1) ウスイロヒヨウモンモドキの観察(平成27年6月13日、新見市草間台)
- (2) ブッポウソウの巣箱観察(平成27年6月20日、高梁美しい森)
- (3) ブッポウソウの巣箱作り体験(平成27年10月25日、高梁美しい森)
- (4) 高梁川の淡水魚観察(平成27年11月7日、岡山県立大学)
- (5) ウスイロヒヨウモンモドキの草原をつくる(平成27年11月28日、新見市草間台)

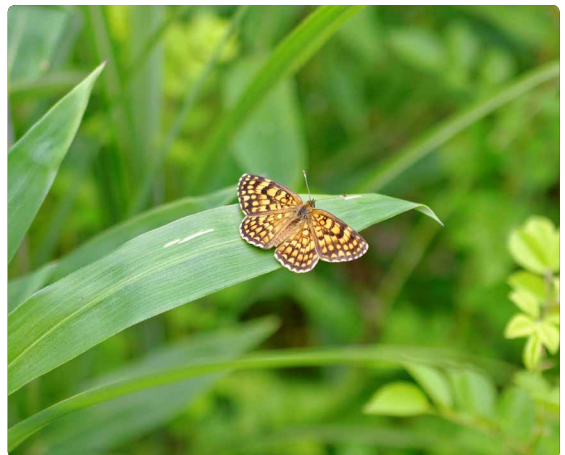
自然環境の保全は、地球規模で取り組まなければならぬ喫緊の課題です。2010年10月には名古屋で「生物多様性条約第10回締約国会議」(COP10)が開催され、その取り組みはますます重要となり、NPO・企業・行政などが問題の解決に懸命に取り組んでいます。しかし、その取り組みを上回るスピードで地球環境の破壊が進み、絶滅危惧種が増大しているのが現状です。

高梁川流域においてもそれは例がなく、自然界の小さな生物に目を向け、その生態を知り、観察することによって、生物は自然とつながる入り口であり、自然環境全体の保全、循環を確保することによってのみ、生物の保護も実現できることを学びます。「いきものが住みやすい環境づくり」は、私たちの暮らしにもつながります。また、絶滅危惧種の保護活動を通じて、地域とのつながりやその活性化にも貢献しています。

■ この事業のミッション

- 絶滅危惧種の保護
- 自然の循環を学び、その保全のための活動の実践
- 地域づくりへの貢献

SAVE JAPAN プロジェクトは、産学民連携で実施している絶滅危惧種の保護を通じて行う自然環境の保全活動です。この活動によって、自然への気づき配慮を啓発していきたいと考えています。同時に地域活性化にも貢献していきます。



備中で暮らす匠(先人)への「聞き書き」事業



伝統文化や暮らしを「聞き書き」を通して知り、
忘れ去られようとしている地域の逸話を再発見・再認識

地域ごとの伝統文化や暮らしなどを知り、地域の
人にも忘れ去られようとしている土地の逸話など再
発見・再認識し、地域を見直すきっかけとなり、若者に
よる地域活性化へとつながることを目的としています。

「聞き書き」は話し手の一方的な「語り」でなく、聞き
手と話し手の「会話」から生まれる地域の生活文化
を後世に伝える技術であり、記録です。高校生、大学
生が、流域の古老や生活文化の担い手などに「聞き書
き」を実施し、その記録をまとめ冊子制作までを行
いました。

若者たちが、聞き手として地域の様々な方々の生き
方や価値観を受け止めながら文章にまとめていく作
業を通して、話し手の人生や集落の実態への理解を深
めていきます。学生からは、「いつの間にか自分の考えが、
話して下さった方の考えと、絡んできていく感じがした」
がありました。人の人生を正面から受け止め、その人
の考えや感性と自分を合わせていくことが、人と人
とのコミュニケーションの始まりなのだという気づきもあり、
聞き書きが地域人としての成長を促すことが出来た
と確信しています。

このような若者による「聞き書き」は、備中地域だ
けでなく県内外でも地域とつながり、若者の成長を促
す手法として行われ、「聞き書き甲子園」という全国
的な発表の場もあります。
今後地域から全国へ、世界へ。若者たちからの成長の
ための事業として、備中地域での聞き書きを継続し
て実施していきたいと思えます。

■この事業のミッション

- 備中地域の知の伝承
- 聞き書きを手法として、備中地域の若者の成長を促す
- 地域活性化への貢献

「聞き書き」という手法によって、若者が地域とつながり、地域も若者と
つながる。地域の忘れ去られようとしている知の伝承は、地域の活性化の
ためにもとても重要な作業となっています。



倉敷市文化遺産を活かした地域活性化事業



備中地域の文化発信と人材育成、後世への継承
「普遍のねうち」を備えた次世代の人材育成

倉敷市文化振興基本計画(平成22年策定)を踏まえ、備中地域の文化発信と人材育成、その継承を目的として、下記の事業を実施しました。

1. 備中志塾の開催

平成27年8月～平成27年12月まで、国指定重要文化財「大橋寺家住宅」にて、①「備中の地理と生活文化」②「備中神楽のみどころ」③「備中紀行」④「備中の食」⑤「節季の祝い」といった内容で全5回実施しました。

2. 備中邦楽の里フェスタ in 倉敷

ア 和の音楽芸能フェスティバルの開催
日本の伝統芸能である邦楽(和楽器を使用した音楽)、古典音楽等に関するイベントを、平成27年10月3日(土)、4日(日)の2日間に渡って実施しました。

イ 和の音楽文化普及促進事業(体験ワークショップ)の開催

7月10日に子どものための鳴り物(和太鼓)「しゃぎり(県指定・無形民俗文化財)」を演奏する子どもたちと、国内を代表する若手邦楽奏者が交流し、ジョイント演奏を実施しました。

2つのプログラムとも高梁川流域(備中地域)の文化歴史、音楽を直に感じ、体験することによって、参加者にその価値を伝えることが出来ました。

備中志塾は、文化庁「文化遺産を活かした地域活性化事業」に採択されてから4年目が経過し、次年度は岡山県備中県民局とも協働して、このプログラムを流域のCATVと連携して認知を広げ、本格的な人材育成を目指して塾生制度に転換させていく計画です。

■ この事業のミッション

- 備中文化・芸能の伝承
- 地域人材育成
- 地域情報の発信。地域活性化への貢献

備中地域の地理、歴史文化、芸能の伝承と地域の知を活用した人材育成を目的としています。特に備中志塾は、地域に留まらず「普遍のねうち」を備えた次世代の人材育成を目指しており、人づくりを通じた地域活性化事業と言えます。



高梁川の川ゴミ調査



高梁川流域の川ゴミ調査を通じて 環境啓発を行い、市民参加型の活動へ

流域の中学生を対象にして、高梁川流域の川ゴミ調査を通じて環境啓発を行うことを目的にしています。

高梁川流域連盟が主催する高梁川流域クリーン一斉活動に合わせて、倉敷市立第一中学校生徒及び保護者がボランティアとして33名参加して、河川に散乱するゴミを回収し、その個数と重量を種類別に計測しました。調査にあたっては、12のグループに分かれ、約30分船穂橋東（A会場）周辺のごみを回収した後、記録用紙の分類に従って、ごみを分類し、その個数と重量を集計記録し、そのゴミの発生源について意見交換をしました。

事業後の中学生向けのアンケート調査では、多くの中学生が「高梁川はきたない」と感じており、河川に散乱するゴミが川についての印象に悪影響を与えていると考えられます。同時に、ゴミ調査に参加して「また参加したい」という感想が多かったことや、河川ゴミ調査を通じて、川ゴミに対する意識の啓発につながったと考えられる回答も多くあり、実際に体験を通じた学びは子どもたちに与える影響も大きいことを改めて実感できた内容でした。

今後は調査範囲の設定を見直す、調査地点を高梁川流域に広げることで、より調査の精度を高めるとともに、市民参加型による調査を進めることで啓発活動としても広めていくことを目指したいと考えています。さらに水質調査、生き物調査も実施し総合的に環境を考えるプログラムとして、高梁川の浄化につながる啓発活動として実施していきたいと考えています。

■ この事業のミッション

- 高梁川流域連盟と協働した高梁川の環境保全活動
- 中学生による高梁川の川ゴミ調査に基づく環境啓発活動
- 高梁川の水質、生き物調査も加えて総合的な環境保全活動への展開

高梁川流域連盟と協働で行う中学生による川ゴミ調査を行いました。今回高梁川の河川敷のごみ調査だけで中学生は「高梁川は汚い」と感じており、今後は水質や生き物調査も加えて総合的な環境調査及びそれに基づく啓発を実施していく計画です。



水島コンビナート関連勉強会(水島コンビナートの進化)



水島コンビナートについて理解を深め、最新技術や歴史を学び、未来社会について課題を共有

高梁川流域、倉敷市、岡山県にとっても最大の地域資源である水島コンビナート。しかしながらその実態はあまりにも知られていません。本事業では、水島コンビナート企業のOB・社員からその歴史や最新エネルギー技術についての講義を頂き、コンビナートを近く知ることとその理解を広げることを目的としています。

プログラムの内容は、水島コンビナートの全体を俯瞰するバスツアー(環境学習センター→鴨が辻→水島港↓環境学習センター)、水島コンビナート現役社員、OBの方々から、水島コンビナート形成の歴史、進化し続けるコンビナートの職場での体験談、技術についての講義を頂きました。講義後、少しコンビナートを身近に感じて頂きながら、参加者からの質問やこれからの地域との共生について意見交換をしました。

参加者からは、水島港に面した東西9km、南北6kmという広大な埋め立て地の製油所、製鉄所、自動車、化学工場、巨大なタンクや溶鉱炉、縦横に延びるパイプライン、百メートルを超える高層煙突の数々、東京タワーに匹敵する長さの巨大船が入港するなど、そのスケールには驚き感動があったとの感想がありました。また公害の歴史を検証し技術的に改善している努力や未来社会につながるエネルギーの課題なども共有も出来ました。

次年度は今回実施のプログラムを基本パターンとして、集客の確保を図り、複数回のプログラムを実施します。

■この事業のミッション

- 水島コンビナートOBの「知」の伝承によるコンビナートの理解促進
- 水島コンビナートの地域資源として活用する方策
- 地域づくりにとって重要なエネルギー政策についての理解促進

高梁川流域にあって最大の地域資源である水島コンビナートについての理解促進を進めるプログラムです。その成り立ち、公害の歴史、世界貿易港としての機能、石油、天然ガスなどのエネルギーのインフラなどをコンビナートOBの方々から講義を頂き、コンビナートを身近に感じるプログラムです。





高梁川流域の地域教育の必要性とその可能性を検証 メディアを通して広く事業の情報を発信

平成28年2月6日(土)10時～16時、倉敷中央病院大原記念ホールにおきまして、高梁川流域学校の平成27年度事業の実施報告と大学と地域が連携した地域活性化の取組み発表とシンポジウムを通じて、高梁川流域の地域教育の必要性とその可能性を検証し、メディアを通して広く流域学校事業の情報発信をしました。

内容は、午前中は、流域学校の実施事業についての報告とゲストスピーカーの先生方や参加者からの評価頂きました。午後は大原美術館専務理事の大原あかね氏による基調講演「川の声に耳を澄ます 一滴が集まりそして海へ」、流域の大学生による地域をフィールドとした取組事例の報告と「持続可能な高梁川流域の社会づくりの試み」をテーマとしたシンポジウムを実施しました。

事業報告については、概ね基準以上の評価を頂きました。流域大学からの報告も非常に良い取組身が多く、今後様々な連携をして事業を進めていくことが出来ると思います。シンポジウムでは、改めて高梁川流域学校は、人と地域をつなぐ活動を推進するという方向性を打ち出しました。

次年度以降は、各事業の成果を数値化した目標設定を行い、具体的な評価を受けられるように内容を詰めていきたいと考えています。さらに参加者参加型のミーティングに成長させていきたいと考えています。

■この事業のミッション

- 高梁川流域学校の実施報告による情報発信
- 地域大学との連携協力によるシンポジウムの開催
- 高梁川流域学校の課題発見、解決に向けての方向性の確認

平成27年度の高梁川流域学校の実施事業を報告し、振り返り評価をするともに次年度の活動の方向性を打ち出す場となりました。流域大学の学生・教員から各大学の取組みについて発表頂き、更に今後の連携の可能性も確認しました。





地域の暮らしが息づく倉敷市内中心にある阿智神社の森の自然を五感を使って感じ、感動と感性を多くの人と分かち合う

本事業は、概ね10歳ぐらいまでの子どもを対象に、地域の暮らしが息づく倉敷市内中心にある阿智神社鎮守の森の自然の中で、子どもたちが五感を使って感じ、その感動・感性を多くの人と分かち合うことができるようなプログラムを、高梁川流域学校初等部あちのもり冬の教室として提供しました。

自然体験だけでなく、子どもたちやその保護者が、自ら体験していることを他者の視点から追認できるような場面を想定して、幅広い世代の人たちとの交流にも主眼に置くこととしました。

プログラムとしては、会場のある鶴形山の斜面を活用した自然体験プログラム「あちのもり探検隊」のほか、木片で暖を取ったり調理をする「ロケットストーブ」「ウッドガストローブ」制作、流域のさかなについて学ぶ「おさかなカルタ」、どんぐりの生態と可能性を丁寧に伝える「どんぐりプログラム」、阿智神社の剪定屑でつくる「ブンブンこま」「あけぼの藤のブローチ」、鶴形山の歴史や阿智神社の成り立ちを知る「阿智神社のお話」など、流域で活躍するNPOおよび地域おこし協力隊、吉備国際大学の学生など大勢のスタッフが協力して実施し、約500名の参加を頂きました。

■この事業のミッション

- 10歳くらいまでの子どもを対象としたプログラムで自然への気づき、分かち合い
- 多世代の交流による自己確認
- 流域地域の大学、NPO法人、団体などとの協働

10歳くらいまでの子どもを対象とした自然体験プログラムを工夫し、五感を使って自然への気づきや分かち合いを目的としました。多世代が交流する中で、子どもが自己を確認する視点も意識して場の演出を行いました。様々な組織体との協働も実現しました。



学生未来プランコンテスト「コヅチ」



高梁川流域の地域課題を通し、 高校生・大学生及び同年代若者の地域参加型学習の場

高梁川流域の地域課題を解決するため、高校生・大学生及び同年代の若者に地域参加型の学習の場を提供し、課題解決プランを作成することを目的とした「学生プランコンテスト」イベントを実施しました。

キックオフミーティング、流域ツアー（水島臨海鉄道、水島コンビナート）、地域課題解決型のアプローチにおけるワークショップ運営、プレゼンテーション大会のプログラムを通じて、参加学生等の「コミュニケーションスキル」「プレゼンテーションスキル」「グループワークスキル」「キャリア形成スキル」「地域への関心」等を高めると同時に、二酸化炭素排出抑制を中心とした、環境配慮型の小学生向け学習プログラムを、複数、企画立案することをねらいとしました。参加チーム7組（大学生5名、高校生12名、同年代の若者3名、合計20名）の参加を得て、実施した。フィールドとしては、岡山県倉敷市に位置する「水島コンビナート」を舞台に実施しました。成長への自己評価について、参加者の63%にポジティブな回答を得ることができ、学習のプログラムとして評価の高い企画が実施できたと思います。成長への自己評価が最も高かったものは、13.4%（63点→82点）へと、大きな成長感を得ている事例もありました。

アンケートへの自由記述からは、「真剣にやるって面白い!」「プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力が大きく向上した」「最後までやり終える」と、とても充実感があつた。「この緊張感が勉強になりました」などの声が見受けられました。

■この事業のミッション

- 高校生・大学生を対象とした地域課題を解決するプラン作成を目的とした「学生プランコンテスト」の実施
- 低炭素社会実現に向けての小学生向けの環境配慮型の学習プログラムの制作
- 水島コンビナートを舞台としたプラン作成で、社会人基礎力を伸ばす

高校生、大学生を対象として、水島コンビナートを舞台にした、小学生向けの環境配慮型学習プログラムをワークショップ形式でプランニングする。プレゼンも設定し、順位をつけて表彰までを行いました。



協力事業

三世代交流型モノづくり事業 { 備中の匠(たくみ)に習う } (子ども備中志塾)

一般社団法人チカク

夏休み宿題応援団として、幼児～小学生および一般を対象に、地域で活躍するアーティストから本格的なモノづくりをまなぶ企画を実施しました。

A 木でつくるカラトリー、B ステンドグラス、C 多肉植物のタブロー

D リーフプリント、木工 3日間 9:30～17:00

広報は、倉敷市環境学習センターから、市内の全小学校にチラシを配布し、計画とおり6月13日より募集を開始し、約 600 名の参加がありました。

協力事業

備中 no 町家 de 暮らす事業

備中町並みネットワーク(事務局:NPO 法人倉敷町家トラスト)

備中の町並みに残る、文化財クラスの建築物や、「蔵・倉」、「商家」、今も暮らしの残る小さな「町家」の空間で、江戸・明治・大正・昭和から平成の現代に伝わる地域の伝統的な生活文化の魅力を五感で体感し、これからの低炭素社会の生活スタイルを考える機会とすることを目的とした。

【内容】「町家でクラス、懐かしい未来」を合言葉に「備中 no 町家 de クラス」を開催した。開催地区は倉敷／美観地区及び周辺地区、玉島、下津井、茶屋町、浅口市／鴨方、高梁市及び吹屋、新見市、総社市、矢掛町、早島町の 28 の町家で 38 のプログラムをと 8 地区でのまち歩きを開催した。

協力事業

緑のインターン事業

NPO 法人フォレスト・フォー・ピープル岡山

実践的なフォレスター養成を目的に、高梁美しい森を実践フィールドとして「森の健康診断」「林地残材搬出講習」「マツ林整備実習」「刈払機取り扱い安全衛生教育」「チェーンソー(大径木)特別教育」を実施しました。

素人向けに特化した内容により、里山保全活動参加へのハードルを下げ、法令に則った講習を開催し、修了証を発行することで、参加者のモチベーションを上げることで、今後の森づくり活動への積極的な参加を呼びかけました。





組織概要

校長	神崎 宣武	(民俗学者 旅の文化研究所所長・文化庁文化審議会専門委員)
顧問	澁澤 寿一	(認定特定非営利活動法人共存の森ネットワーク 理事長)
顧問	川嶋 直	(公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長)
顧問	大社 充	(特定非営利活動法人グローバルキャンパス 理事長)
顧問	山田 俊行	(トヨタ白川郷自然学校 学校長)
代表理事	大久保 憲作	(倉敷木材株式会社 代表取締役社長)
副代表理事	森光 康恵	(きび工房「結」)
副代表理事	赤木 美子	(一般社団法人チカク 代表理事)
理事	中村 泰典	(特定非営利活動法人倉敷町家トラスト 代表理事)
理事	山下 武伺	(特定非営利活動法人フォレストフォーピープル岡山 理事長)
理事	坂ノ上 博史	(一般社団法人倉敷未来機構 代表理事)
監事	古川 明	(新水マリン株式会社 代表取締役社長)
監事	坂本 万明	(株式会社倉敷ケーブルテレビ 代表取締役社長)
事務局長	岡野 智博	(一般社団法人水辺のユニオン 代表理事)

各事業の組織構成

『高梁川流域学校設立記念シンポジウム』

一般社団法人高梁川流域学校

『高梁川トレイルによる風土ツーリズム開発』

一般社団法人高梁川流域学校、一般社団法人水辺のユニオン、LAID-BACK DESIGN

『高梁川マルシェ』

一般社団法人高梁川流域学校、一般社団法人水辺のユニオン、LAID-BACK DESIGN

『SAVE JAPANプロジェクト』

一般社団法人高梁川流域学校、NPO法人岡山NPOセンター、認定NPO法人日本NPOセンター、損害損保ジャパン日本興亜株式会社

『備中で暮らす匠(先人)への「聞き書き」事業』

備中「聞き書き」実行委員会

『倉敷市文化遺産を活かした地域活性化事業』

一般社団法人倉敷未来機構、一般社団法人高梁川流域学校、倉敷市大橋家住宅活用実行委員会、備中邦楽の里フェスタ実行委員会

『高梁川の川ゴミ調査』

高梁川流域連盟、公益財団法人水島環境再生事業団、一般社団法人高梁川流域学校

『水島コンビナート関連勉強会(水島コンビナートの進化)』

一般社団法人高梁川流域学校、水島カタリーベの会

『高梁川ミーティング』

一般社団法人高梁川流域学校、公益社団法人有鄰会、倉敷中央病院、岡山大学、岡山県立大学、くらしき作陽大学、倉敷芸術科学大学、吉備国際大学

『高梁川流域学校 初等部 あちのもり分校 冬の教室』

一般社団法人高梁川流域学校、一般社団法人チカク、NPO法人フォレストフォーピープル岡山

『学生未来プランコンテスト「コヅチ」』

一般社団法人高梁川流域学校、一般社団法人高梁川プレザンターレ



高梁川流域学校のサポーターを募集しています

賛助会員へのご入会・ご寄附のお願い

私達の活動の趣旨に賛同し、支えて下さる賛助会員様、団体・個人の方からのご寄附を募集しています。
ぜひサポーターとして、優れた地域教育プログラムを次世代につなぐ高梁川流域学校を応援してください。

事務局あてにお名前・ご住所 / 連絡先をお知らせいただければ、入会申込書をお送りいたします。

高梁川流域学校 事務局

住所 〒 710-0055 倉敷市阿知 3 丁目 5-5
電話番号 090-4800-1110
FAX 050-3588-6427
メールアドレス takahashi_river1506@gmail.com
ウェブページ <http://liron.jp>

